

山崎三郎先生を偲ぶ

杉ノ原保夫

昭和四十九年四月二十四日早朝、虎の門病院の廊下で、手術室に向われる山崎先生と一言、二言言葉を交わしたのが先生とお話した最後になってしまった。その日の夕方、手術室から帰って来られたときにはすでに先生の意識はなく、二十八日ついに先生の心臓の鼓動が止まるまで深い昏睡から覚められることはなかった。

先生を追悼して、この一文を書いている今も、先生のあの太い声が、足早やな靴音が聞えて来るような気がしてならない。

山崎先生は、東大御卒業後まもなく、本学の前身である旧制成城高等学校の教授となられ、約十年を過ごされた。そして、昭和四十四年東大を停年退官後、ふたたび本学経済学部教授として成城にお戻りになった。いわば、先生の教師としての御生涯は、成城で始まり、成城で終えられたのである。

先生の講義は、若い学生に対する愛情に溢れ、それでいて甘えを許さない、明快かつ魅力に満ちたものであった。深く感銘を受けた学生が多かった。

先生が特に熱心に研究されたのは「可分な Banach 空間における基底の存在問題」である。この問題は、今

山崎三郎先生を偲ぶ

日では古典となつてゐる S. Banach の著書 *Théorie des Opérations Linéaires* (Chelsea, 1932) に *en fait*, Banach 自身の提起した有名な問題である。非常に難かしい問題で、最近になつてようやく、「存在問題」自体は スューデンの若い数学者 P. Enflo によつて否定的な解決をみた。つまり、基底をもたない可分な Banach 空間が Enflo によつて作られたのである (P. Enflo, A counterexample to the approximation problem, *Acta Math.* 130 (1973))。しかし、もちろんこのことによつて、山崎先生の研究を含めて、この方面の研究の成果の重要性はいささかも減少したわけではない。基底との関係における Banach 空間の性質の探求 (山崎先生の研究はこの線にまつたものといえる)、Banach 空間よりもより一般的な空間—線型位相空間への基底概念の拡張など活潑な研究が多くの数学者によつて今も進められているのが現状である。

先生の研究は五篇の論文にまとめられ、東大教養の紀要に発表された。各国の学者のこの方面の論文はすでに三百篇は越えると思われるが、これらの成果を系統的にまとめた最初の単行本である J. T. Martin の *Introduction to the Theory of Bases* (Springer, 1969) は九章のうちの一章を割いて先生の結果を紹介しており、また続いて出版された I. Singer の *Bases in Banach Spaces* (Springer, 1970) にも先生の四つの論文が引用されている。

専門の研究のほかに、早くから独学でロシア語を葉篋中の物とされた先生は、御自身ソ連のすぐれた数学書を邦語に移されただけでなく、多くの若い数学者にロシア語を教えられ、ソ連の数学書を我が国に紹介する上で先駆的な貢献をなされた。戦後、アメリカ式の単元学習方式が旺になると、遠山啓氏等と共に数学教育協議会を発起され、単元学習の撤廃、数学教育の正常化のため活潑な活躍をされた。最近では日本科学者会議の機関紙「日

本の科学者」の編集委員として献身的な活動をしておられた。先生の急逝は我国の科学者運動にとってほんとうに大きな損失というべきである。

時として、パチンコを楽しまれたことはあったが、およそ遊びというものとは無縁であった先生が、最近碁を覚えられ、私などときどきお相手をするのがあった。持前の徹底的な研究癖で、棋書も数多く読破され、木谷道場まで通われる先生の正攻法には、碁では多少先輩格であった私などもたじじになつたものである。子供のように澄んだ眼でまじまじと眺められ、「弱った、弱った」を連発された先生の姿が懐かしく思い出される。日本の古代史、古代日本語と朝鮮語との関係などにも非常に熱心で、造詣が深かった。老い込むことを忘れになつたように、いつも新しいことに熱中されていたようだ。

不公正なものに対して激しく憤慨されることの多かつた先生は、反面非常にやさしい心を持たれた、必要以上に相手に心遣いをされる人であつた。手術の日が近づいてからも、今日は風が強くて危ないから車で来るのは止めるようにとむしる私のことを心配して下さる先生である。先生は他人の苦しみに心から同情できるやさしい心の持主であつた。弱い立場にある者、不幸な者、貧しい人々に対する心からの愛情が先生の発想の基盤であり、先生の社会的思想の基調になつてゐる。

手術の前日には、手術の注意書を朱線を引きながら熱心に読まれ、手術に備えて体力をつけるといつて病院の食事も何一つ残されなかつたのに、日頃の先生の歩き振りさながら、足早やに逝つてしまわれた。まだまだ多くの事を先生から教えて頂きたかつたのに、残念で仕方がない。しかし、先生の一生は、数多くの友人や後輩に、親しまれ、尊敬されながら、御自分の道をまっすぐに歩みつづけられた、うらやましいほど幸せな、実にすがす

山崎三郎先生を偲ぶ

がしい一生であったと思う。